入選

心動かす言葉と行動

群馬県　北中学校
１年　江原維吹

僕は、４月から中学生になりました。初めての制服、初めての自転車通学、部活動など小学生のときより生活がガラッと変わり、慣れるまでとても不安でした。

中学生生活に少し慣れてきた５月、学校行事の廃品回収がありました。地域の人たちに事前にお願いしていたダンボールや新聞紙、空きカンなどを僕たち中学生が中心になって集めに行く日です。僕は、母親といっしょに決められた場所を回りました。

各家の前においてある新聞紙などを運び始め、「重いなあ。」「暑いなあ。」という気持ちが大きくなりました。すると、わざわざ家の中から出てきて「ありがとうね。」「重いけどお願いね。」と声をかけてくれる人がいました。「ありがとう。」の言葉はまほうのようで、さっきまでの気持ちが一瞬で吹き飛びました。

そこからやる気が出て、どんどん回っていくと、今までとはレベルが違う量の新聞紙や古本、空きビンなどが山積みになった家にたどりつきました。さすがに、少し疲れていたので「もう無理だ。」「うそだろ。」「これ全部乗せられるかなあ。」と心の中でさけんでしまいました。

母親と車のトランクを開け、乗せ始めようとすると、その家の人が出てきて、「こんなにたくさん出して大丈夫？」と声をかけてくれました。僕は、「大丈夫です。」としか言えませんでした。

積み方に迷っていると、その家の人もいっしょになって積み込みを手伝ってくれました。その方の適切なアドバイスのおかげで、すべてスムーズに積みこむことができ、達成感を味わえました。

「やったあ。」と思わず声が出ました。たくさん汗をかいて、とても疲れたけれど、「ありがとうございました。」と心から言葉が出てきました。笑顔で手伝ってくれた家の人に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。すべての家を回り終えて学校に持っていくと、みんなの驚く姿になんだか嬉しくなりました。初めての廃品回収で、いろいろな気持ちを味わうことができ、とてもいい経験になりました。

今回の経験で、人の温かい言葉や、思いやりのある行動にふれ、マイナスに感じてばかりいた自分の気持ちがプラスに変わることができました。「親切」というのは、言葉でも行動でも伝わるのだなと感じました。

思いやりの心を持って人のために何かをすること、僕も意識しすぎず、さりげなくできる人になりたいと思いました。